

解答

- ① 1 刊行 2 公演 3 解熱 4 過ち 5 因習
6 意義 7 快く 8 要約 9 標本 10 冷め

- ② 問一 1 心 2 気 問二 1 ウ 2 ア 3 イ
問三 1 説 2 敗 3 周 4 回送 5 成年
問四 1 付 2 ○ 3 知 4 化

- ③ 問一 登れそうな斜面を探して登り、登山道に行き着くため。
問二 いつの間に 問三 A 平らな場所 B 一夜を明かす
問四 ウ 問五 イ 問六 ア 問七 ウ 問八 イ 問九 エ
④ 問一 エ 問二 A ウ B ア C イ
問三 ウ 問四 ウ 問五 いろいろな経験

問六 好奇心を大事にして、面白そうだと思うものは何でもやってみながら、自分に向いているものを考えてみるとよい。

問七 a イ b ア c ウ 問八 エ 問九 ア

解説

- ③ 出典は、山口理「生き抜け！ 遭難の五日間」〈文研出版〉。

問一 「登れそうな斜面を探して登る。それしかない」(11行め)という恭介の言葉に、「たしかにそれしかない」(13行め)と瞬も考え「とにかく歩くことにした」のです。瞬は岳から、山で遭難した時の心構えとして、7・8行め「下っちゃいけないんだ。とにかく登る。そうすれば必ず登山道に行き着くから」と教えられていたからです。

問二 悠人は、運動が苦手で、今も「まっ赤な顔をして、肩で大きく息をしてい」ます。同じように悠人の疲れを表している描写を探すと、38～40行め「いつの間にか悠人は座りこんで、頭を両ひざの間にめりこませている。何がどうなってもいいから、早く休みたいという感じだ。」という二文が見つかります。

問三 「ビバーク。それは予定通りに行動できなくなり、思いがけない場所で一夜を明かすことだ。つまり野宿」(29～31行め)、「だからとにかく、少しでも平らな場所を探すんだよ」(35・36行め)とあります。

問四 恭介は歩きながら「これが、道迷ってやつか」とつぶやきます。具体的には、60～63行めに「今自分たちが登っているのか、下っているのかさえよくわからない。単に平行移動しているだけなのか」とあり、自分たちがどこをどう歩いているのかまったくつかめておらず、不安だけが増しているのです。

問五 ビバークの場所が見つかり、三人はおにぎりを食べています。瞬は、おにぎりを明日まで取っておこうと提案しました。それは、「山の弁当は一口残せ」「山では何があるかわからない。なに分にも用心を忘れるな」(76～78行め)という岳ちゃんの言葉を思い出したからです。瞬は勝手に先を見に飛び出す(前書き)ような軽率さもありますが、同時に、ピンチにも冷静な判断ができる資質もあるのです。

問六 第一場面は、58～60行めにあるように「もうすぐ日が暮れる。気持ちばかりあせるけど、ササがますます深くなって、思うように進むことができない。急げ、急げ！」とビバークの場所が見つからずあせるばかりです。しかし、第二場面は、居場所が見つかり食事でもできたため、81行め「まわりを見回すようもいづらか出て」自分たちの置かれた状況を考えられるようになってきています。

問七 少し落ち着いた三人は、いろいろな人のことを考えます。瞬は「おれは、岳ちゃんのことが一番気がかりだ。おれたち三人を任^{まか}されて山に入ったのに、こんなことになって。どれだけ責任^{せきにん}を感じているだろうか」(91～94行め)と思っています。岳の立場を考えると、自分のとった軽はずみな行動が悔やんでも悔やみきれないのです。

問八 瞬がやれやれといった感じでため息をついている様子から考えます。

問九 悠人と恭介はもう寝^ねてしまいましたが、瞬は考えごとで眠^{ねむ}ることができません。岳ちゃんや両親も眠れないでいると考えながら、瞬は、120～124行め「(だいじょうぶだよ、岳ちゃん。おれたちは三人ともちゃんと生きてる。父さん、母さん。心配しないで。たぶん明日には帰れるから)」と強く思い、「この思いがテレパシーとして、みんなに届^{とど}きますように」と願^{ねが}いながら眠りに落ちるのです。

④ ^{しゅってん} 出典は、^{おかもとひろし} 岡本啓史「なりたい自分との出会い方」〈岩波書店〉。

問一 「すきやりが特^{とく}にないという人は、早く見つけなくちゃダメだ、と焦^{あせ}ること」(9・10行め)もあるかもしれませんが、「無理せず少しずつすきやりを見つめましょう」(14・15行め)と言っています。

問四 43・44行め「すきやりがいくつもあるなら、それは人生の楽しみがいくつもある」という部分から「イ」、52～54行め「目^{もく}標^{ひょう}が途^と中^{ちゅう}で変^かわるのも、ごく自然^{しぜん}なことです。いろいろ試^{ため}してみ、思っていたのと違^{ちが}った、他^{ほか}にやりたいことができた」という部分から「エ」、63～65行め「いろいろ経^{けい}験^{けん}すればするほど、～やりたいこと・やりたくないことが見えてきます」という部分から「ア」が適^{てき}切^{せつ}だとわかるので、適切でないものは「ウ」です。これは39～42行めにありますが、筆者の考えではありません。

問五 空欄^{くうらん}に入るものが、「自分の可能性^{かのうせい}を広げ、人生^{じんせい}を豊かに」すると筆者は言っています。筆者自身も「私の演劇^{えんげき}の経^{けい}験^{けん}が教育の場で役立ち、～一見まわり道に見える経^{けい}験^{けん}が、意外なところでつながることが多々あります」(47～51行め)とあります。この「一見まわり道に見える経^{けい}験^{けん}」と近い意味の言葉を七字で探^{さが}すと、30行めに「いろいろな経^{けい}験^{けん}」が見つかります。

問六 何かをやってみたいと思っている時にブレーキをかけてしまう人へのアドバイスとして、筆者はまず72～74行め「好奇心^{こうきしん}を大事にして、少しでも面白^{おもしろ}そうだと思うものは、～とにかくやってみましょう」と言っており、さらに、89・90行め「それから自分がそれに向いているかどうか考えてみましょう」と述べています。したがって、この2ヶ所を使って具体例^{ぐたいれい}を入れないようにしてまとめましょう。

問七 「百聞は一見にしかず」をアレンジした言葉を考えます。手がかりは81・82行め「人から聞くより見る、見るより考える、考えるより行動してみる」の部分です。「百聞は一見にしかず」が「聞くより見る」にあたるので、「見るより考える」が「百見は一考にしかず」、「考えるより行動」が「百考は一行にしかず」となります。

問八 見出しにしたがって本文を4つの意味段落^{だんらく}に分けます。まず「すきやり」とは何かという話題は①段落。「すきやり」が見つからなくても焦らなくていい、という内容^{ないよう}が②段落～⑤段落。「すきやり」がいくつあっても変わったとしても、いろいろな経^{けい}験^{けん}をするといい、という内容^{ないよう}が⑥段落～⑩段落。好奇心を大事にしてとにかく行動してみよう、という内容^{ないよう}が⑪段落～⑬段落となっています。

問九 本文最後の88～90行めに「何事も一度やってみて～自分がそれに向いているかどうか考えてみましょう」と、何でもやってみる事の大切さを説^といています。さらに、58～65行め「まずは体験^{たいけん}してみて、向いていないと思ったら変えてみることも大事～失敗^{しっぱい}したくないと思って何もやらないよりは、よっぽど学びにつながります。いろいろ経^{けい}験^{けん}すればするほど、自分が価値^{かち}を見出しているものや、やりたいこと・やりたくないことが見えてきます」と、行動してみることで「すきやり」も見つけられる、と述べています。